

『ミドルマーチ』の諷刺家メアリ・ガース：

ポリフォニーとしての『ミドルマーチ』

松本 三枝子

I ポリフォニーとしての『ミドルマーチ』

元来イギリスでは、倫理意識や自制心は、貴族階級の放蕩や墮落を批判する中産階級的美徳であり、価値観であった。しかし、19世紀になり、その美徳は、もっぱら、中産階級の女性に求められるものとなっていく。コヴェントリー・パットモアの長編詩『家庭の天使』（1854-63）に象徴される女性像は、そのようなドメスティック・イデオロギーを如実に表現している。「家庭の天使」とは、家族のために自己を犠牲にし、倫理観あふれる良妻賢母のような理想像である。

この時代に書かれた小説の多くが、そのようなイデオロギーを増幅させる役割を担っていたことは、異論がないであろう。さらに、Deirdre Davidを初めとする研究で、女性作家たちが果たした役割も明らかになっている。彼女たちも自己実現を求める一方で、矛盾を感じながらも、そのような自己犠牲的な理想の女性像やイデオロギーを補強する役割を果たした。

デイヴィッドが、*Intellectual Women and Patriarchy* において議論しているのは、Harriet Martineau、Elizabeth Barrett Browningに加えて、George Eliotである。これらの研究を初めとして、現在では、エリオットは、ヴィクトリア朝の規範から逸脱した、その過激な人生とは裏腹に、保守的な作家として位置づけられることが多い。

しかし、彼女が書いた長編小説は、実に複雑で、かつ巧みに語られており、単一の価値観や評価を跳ね返す力にあふれている。このような小説を解釈するのに適切な批評方法とはいかなるものなのか、現代の研究者は悪戦苦闘している。エリオットの小説が内包する多様な価値の共存、視点の多焦点化等は、彼女自身が意識したものでもあり、『ミドルマーチ』の中でも実践されている。

例えば、ヒロインのドロシア・ブルックの不幸な結婚生活は、彼女の視点からのみ、語られるのではない。夫であるエドワード・カソーボンが感

じたドロシアへの不満や不信も、過不足なく語られている。ターシアス・リドゲイトとロザモンド・ヴィンシーの夫婦生活についても同様のことがいえる。

リドゲイトにとり、結婚前のロザモンドは、仕事に熱中する夫を家庭で優しく迎え、癒してくれる家庭の天使のような女性と思われた。しかし結婚後、経済的に逼迫する夫にとり、浪費家で、体面にこだわるロザモンドは、夫を癒すどころか、彼を阻害し、追いつめていく存在と化す。この2人の結婚生活は、医業を天職と自負するリドゲイトと、それを見下すロザモンドの葛藤の場となる。語り手は、物語前半で、この野心家のリドゲイトの世俗主義と、女への一途な愛に溺れる危うさを指摘する (*Middlemarch* ch. 15)¹。かたや、ロザモンドの頑固さにも言及することを忘れてはいない (ch. 45)。このように、この小説は、単一の視座から語られることはなく、物語が伝えようとするメッセージも単純なものではない。

上記からわかるように、『ミドルマーチ』は、1人のヒーローやヒロインに収斂していく物語ではない。主要なプロットは4つで、ドロシア、リドゲイト、ニコラス・パルストロード、メアリ・ガースを中心に展開している。これら4つのプロットは、相互に語り合い照らし合いながら、物語は、ミドルマーチというイギリスの19世紀初期の田舎の都市を、多様な視点から語っていくのである。第1次選挙法改正時代の地方都市は、変革を内包する時空である。階級、貧富、ジェンダーの境界を越えて、改革の予感が、この小説を満たしている²。社会とは、多様な価値観を持つ個人の有機的な集合体であり、そのような社会を語る言語とは、単純なものではないと予想できる。

ミハイル・バフチンが、『小説の言葉』の一節「現代の文体論と小説」において、「全体としての小説——それは多文体的な、様々な言葉と声の現象である」と言っている (p. 14)³。彼は、特にイギリスのユーモア小説として、ヘンリー・フィールディング、トビアス・スモーレット、ローレンス・スターン、チャールズ・ディッケンズ、ウィリアム・サッカレーをあげて、その言語的多様性について、「その時代における標準的な話し言葉及び書き言葉のほとんどあらゆる層のユーモラスなパロディー的再現を見出すことができる」と指摘している。

『ミドルマーチ』を、バフチンのいうユーモア小説の系譜に入れてもよいと思うが、そこまで大胆にしないまでも、上記の言語的多様性は、正に

『ミドルマーチ』の諷刺家メアリ・ガス：ポリフォニーとしての『ミドルマーチ』

『ミドルマーチ』の特徴でもありと考えられる。しかし、バフチンが言うところの「ポリフォニーとしての小説」という観点で、『ミドルマーチ』を分析したものは、非常に少ない。デイヴィッド・ロッジが書いた『バフチン以後——ポリフォニーとしての小説』(1990)、Timothy Morrisの“The Dialogic Universe of *Middlemarch*: Bakhtin’s Dialogic Fiction”(1990)、Wendell V. Harrisの“Bakhtinian Double Voicing in Dickens and Eliot”(1990)等が読める程度である。

『バフチン以後——ポリフォニーとしての小説』で、ロッジは古典的リアリズム小説を、2つの言説——ミメシスとディエゲシスの混合とみなし、議論を展開している。ミメシスとは、他人の言葉を模倣して語ることであり、ディエゲシスとは自分自身の言葉で語ることである。ロッジは、この2つの言説がしばしば見分けがつかないほど融合した例として、『ミドルマーチ』におけるドロシアの描写を、「現代小説におけるミメシスとディエゲシス」において分析している。

ロッジによれば19世紀のリアリズム小説の特徴は、通常考えられるような語り手の言説による登場人物の支配ではなく、読者に常に疑問を投げかけ、読者を道徳的判断の形成過程に巻き込むことである⁴。

そこで、拙論では、ロッジのそのような議論に基づきながら、『ミドルマーチ』において、主要な人物でありながら、注目されることが少ないメアリ・ガスを分析し、彼女がこの小説で果たす重要な役割を明らかにしたい。

II メアリ・ガスの社会的地位と自己決定権

メアリ・ガスの父親、ケイレブ・ガスは、近隣のジェントリーの所有地で土地差配人として働いている。それゆえ、娘のメアリは、中産階級に所属すると判断される。しかし、ケイレブは有能であるが、経済的には恵まれない人物である。産業革命以後には Enclosure Movement も広がり、土地差配は大土地所有者にとり、経済効率を上げるため重要であった。

それゆえ、ケイレブ・ガスは、ミドルマーチのジェントリー階層の内情に通じ、その経済力の鍵を握る人物と期待できるのだが、現実はそのようにはなっていない。彼は農地の改良や、その有効利用のための改善計画の仕事をするに、誇りと喜びを感じているが、その仕事に見合った報酬を要求することが苦手な人物である。仕事に対する頑固さから、雇主と

トラブルになることもある。

このケイレブが、フレッド・ヴィンシーの借金のために、£160の小切手を裏書したことから、ガス家は経済的に困窮し、息子の教育費にも苦労することになる。読み書き等の実践的な教育を重視する、ガス家の考え方は、ガス夫人が子供たちに読み書きを教える場面でも明らかである。

しかし、この一家は、その貧しさゆえに、ミドルマーチの中では、軽視され、看過される存在である。縁戚関係にあるヴィンシー家とガス家だが、今や前者はミドルマーチの市長であり、工場経営者として、成り上がる中産階級の典型のような一家である。それに比べて、ガス家は、ヴィンシー夫人からも、その貧しさゆえに見下されている (ch. 11)。

しかし、そのようなヴィンシー家の美しい娘であるロザモンドを家族の宴席に決して招こうとしないのが、ブルック氏である。その理由は次の引用で明らかである。

The Miss Vincy who had the honour of being Mr Chichely's ideal was of course not present; for Mr Brooke, always objecting to go too far, would not have chosen that his nieces should meet the daughter of a Middlemarch manufacturer, unless it were on a public occasion. (pp. 57-8; ch. 10)

地主階級のブルック氏には、姪たちが工場経営者の娘と同席することなどは、とうてい容認できることではない。一方、ヴィンシー嬢、つまりロザモンドの側からも、ブルック氏の姪である、ドロシアやシーリアが、教会の貴賓席に座る様子を羨望の眼差しで見る描写もある。このように地主階級のドロシア、工場経営者の娘であるロザモンド、土地差配人の娘であるメアリは、それぞれがおかれた社会的階層の違いを明確に描き分けられている。この3人の中では、最も低い社会的階層の中に位置づけられているのが、メアリである。加えて、彼女は、ドロシアのような清楚な美しさも、ロザモンドのような男好きのする魅力にも無縁である。

しかし、メアリがこの小説で果たす役割は、下層中産階級という身分や、平凡な顔つきであることに影響を受けはしない。むしろ、そのような限定的な身分であること、ありふれた容貌ゆえに、彼女が経験せねばならない人生に、彼女の魅力の根源がある。つまり、自活するメアリの魅力である。

フェザーストン老人の介護を引き受けているメアリは、その僅かな取

入から貯金をしている。この仕事がないければ、家庭教師として収入を得て生活することを余儀なくされている。従妹のロザモンドの結婚支度のために、リネンの刺繍をしているのも、僅かな収入の足しにするためである。父親の収入をあてにしていないメアリは、自活することを余儀なくされている。経済的に自立することを当然と受け入れているメアリにとり、フレッドが、フェザーストーン老人の遺産を期待していることを、情けなく感じている。

親の遺産で、年収£700を有するドロシアや、扶養され、何不自由なく暮らせることを当然視するロザモンドとは、全く異なるメアリの生活が極めて肯定的に、『ミドルマーチ』では描かれている。メアリは、扶養されるよりも、経済的に自立することを選択している。父親が、フレッドの借金の保証人をして、一家が負債を負った時に、彼女の僅かの貯金が一家を救う。

両親は彼女を、娘ではあるが、自立した存在として温かく見守っている。それゆえ、メアリには限定的だが、自己決定権があるといえる。小説内の2つの場面を見て、彼女の自己決定権を明らかにしよう。

最初の場面は、フェザーストーン老人の介護のために、寝ずの番をしているメアリを描いている。

Mary was fond of her own thoughts, and could amuse herself well sitting in twilight with her hands in her lap; for, having early had strong reason to believe that things were not likely to be arranged for her peculiar satisfaction, she wasted no time in astonishment and annoyance at that fact. And she had already come to take life very much as a comedy in which she had a proud, nay, a generous resolution not to act the mean or treacherous part. (p. 197; ch. 33)

上記からわかるように、メアリのこれまでの厳しい人生は、彼女に自制を求めるものであったとわかる。しかし、彼女はそのような自らの置かれた状況を冷笑的に捉えるのではなく、人生を喜劇として受け止め、自らを貶めることがないようにと覚悟を決めている。

そのような彼女にとり試練となるのが、フェザーストーン老人の最後の要求である。

He lowered his tone with an air of deeper cunning. “I’ve made two wills, and I’m going to burn one. Now you do as I tell you. This is the key of my iron chest in the closet there....”

“I cannot touch your iron chest or your will. I must refuse to do anything that might lay me open to suspicion.” (p. 199; ch. 33)

自らの遺産を背景に、周囲の人々を翻弄し続けたフェザーストーン老人であるが、遺言を変更しようとする彼の最後の望みは、メアリにより拒否される。老人はメア리를従わせるために、札束で誘い、杖で脅すが、彼女の拒否に合う。メアリは、最後まで、自らの人生の自己決定権を渡すことはない。自らに疑いがかかるようなことは決してできぬという決意は、揺るがぬものである。

メアリの自己決定権が明らかになる、もうひとつの場面がある。それは、彼女が尊敬するフェアブラザー牧師から、フレッドへの愛情を尋ねられる場面である。

Mr Farebrother ... said, “I understand that you resist any attempt to fetter you, but either your feeling for Fred Vincy excludes your entertaining another attachment, or it does not: either he may count on your remaining single until he shall have earned your hand, or he may in any case be disappointed.” ... Mary in her turn was silent, wondering not at Mr Farebrother’s manner but at his tone, which had a grave restrained emotion in it. When the strange idea flashed across her that his words had reference to himself, she was incredulous, and ashamed of entertaining it. (pp. 321–22; ch. 52)

結局彼女は、フェアブラザー牧師からの愛情を感じながらも、幼なじみのフレッドへの変わらぬ愛を明言することになるのだが、その時の彼女の思考過程が次のように書かれている。

She had never thought that any man could love her except Fred, who had espoused her with the umbrella ring, when she wore socks and little strapped shoes; still less that she could be of any importance to Mr Farebrother, the cleverest man in her narrow circle. She had only time to feel that all this was hazy and perhaps illusory;

『ミドルマーチ』の諷刺家メアリ・ガス：ポリフォニーとしての『ミドルマーチ』

but one thing was clear and determined—her answer. (p. 322; ch. 52)

尊敬する牧師からの愛情は、明言されたものではなかったので、霧がかかったようで、彼女にとり錯覚のようにも感じられた。明らかでないもの、曖昧なものに、期待を抱かぬ彼女の性格は、結局迷いを生じさせない。彼女の母親は、娘に対する牧師の好意を感じて、期待しているのだが、メアリが、母親に相談することはない。メアリは自らの人生に対して、自己決定権を有しているからである。

以上見てきたように、メアリは『ミドルマーチ』において、貧しいながらも経済的に自立することができ、それゆえに自らの人生において自己決定権を有する数少ない女性である。しかし、彼女自身の言葉通り、自らの辛酸に満ちた人生を喜劇と見なしているメアリは、深刻にではなく、快活に、自らの役割を演じている。

社会階層的には、ドロシアとは異なり、経済的には、ロザモンドとは、雲泥の差があるが、メアリの自制心と現実主義は、ドロシアやロザモンドの結婚や人生に明らかな対比をなしている。このような対照法に対して、語り手は、次のように興味深い言葉を語っている。

It seems an easier and shorter way to dignity, to observe that—since there never was a true story which could not be told in parables where you might put a monkey for a margrave, and *vice versa*— whatever has been or is to be narrated by me about low people, may be ennobled by being considered a parable; so that if any bad habits and ugly consequences are brought into view, the reader may have the relief of regarding them as not more than figuratively ungentle, and may feel himself virtually in company with persons of some style. (p. 212; ch. 35)

「譬え話」という表現で、侯爵を語ることで、猿について語ることができ、またその逆も可能であると、語り手は読者に、述べている。この箇所は、フェザーストーン老人の遺産が、予想に反して、ミドルマーチの人々にとってはよそ者であるジョシュア・リッグに相続されることになった顛末を語った章の結末にある。

猿と侯爵という極端な組み合わせを例証として、比喻の力を語り手は説いている。『ミドルマーチ』におけるメアリ・ガスと、ドロシア、ロザ

モンドとの関係は、正に比喩の力により読み取られるべき関係にある。語り手が説いているように、低俗な話は、比喩として読めば、容易に高められるものである。下層中産階級であるメアリの態度や言葉は、紳士階級のドロシアや富裕層のロザモンドへの批判となっていく。しかし、その批判は、メアリが人生を喜劇ととらえていることにも影響されて、深刻というよりは、笑いや諷刺が効いたものとなっている。

次章では、そのようなメアリの言説を具体的に分析していこう。

III メアリ・ガースの言説分析

メアリの言説は、『ミドルマーチ』に登場する女性たちの中で、際立ってユーモアに富んでいる。特にそれが鮮明になるのが、フレッドとの会話である。ドロシアとカソーボンの夫婦、そしてリドゲイトとロザモンドの夫婦の会話と比較した時に、メアリとフレッドの間で交わされる会話は、相互理解の上に成立した会話であると痛感する。

しかし、メアリの言説は、単純ではない。フェザーストン老人にいじめられ、苦勞するメア리를氣遣うフレッドに、彼女は次のように答えている。

“Oh, I have an easy life—by comparison. I have tired being a teacher, and I am not fit for that: my mind is too fond of wandering on its own way. I think any hardship is better than pretending to do what one is paid for, and never really doing it. Everything here I can do as well as any one else could; perhaps better than some—Rosy, for example. Though she is just the sort of beautiful creature that is imprisoned with ogres in fairy tales.” (p. 88; ch. 14)

ここで注目したいのは、2点である。ひとつは、自分には教職が適していないと認めていることである。奮っているのはその理由である。教職とは、給金のために、実際には何もやっていないのに、やっている振りをする仕事であると、メアリは感じている。辛くとも介護の仕事の方がましであるし、自分は他の人よりも上手くできもする。

19世紀イギリスにおいて、中産階級の女性が体面を汚さずに就ける仕事には、限りがあった。教職は、その中で最も一般的な仕事であったはず

だ。フレッドが聖職に就くことにも反対していることから、メアリが専門職、中産階級の典型的な仕事よりも、体を使う実務の仕事、職人の仕事に好意を持っているのがわかる。つまり、社会階層的には、下層中産階級の生活を好しとしているのである。

上記の引用箇所、注目すべきふたつめは、従妹のロザモンドの美しさも、介護には役に立たないものと述べていることである。金髪色白のロザモンドの美しさに比べて、メアリは浅黒い自らを“brown patch” (p. 73; ch. 12) と、自嘲気味に表現する。しかし、メアリはロザモンドの美貌を羨望する気配もない。彼女の言葉が、辛らつにならないのは、「おとぎ話で、鬼に閉じ込められたお姫様」とロザモンドを表現する比喩のおかげである。

メアリとフレッドの会話のキー・トーンとなるのは、フレッドの求愛と、それに対するメアリの回避と遅延である。聖職者になるべくケンブリッジに進学しながらも、卒業試験に落第したフレッドは、フェアブラザー老人の遺産を目当てに、墮落した日々を過ごしている。メアリは彼を情けなく思いながらも、自分への愛情を嬉しく感じている。

同時に、放蕩息子に対する母親のような愛情を感じている。遊蕩のために負った借金の保証を、メアリの父に依頼したフレッドは、彼女に辛辣に批判される。彼女の僅かの貯金を工面し、弟の教育費を犠牲にして、ガス家はこれを支払うことになるのだから、彼女の怒りは当然である。しかし、語り手は、彼女の怒りが静まる感情の変化を次のように表現している。

There is often something maternal even in a girlish love, and Mary's hard experience had wrought her nature to an impressibility very different from that hard slight thing which we call girlishness. (p. 161; ch. 25)

自分を愛している幼なじみに対して、メアリが感じている愛情を「少女の愛」と表現しながら、そこに母性愛があることを語り手は指摘している。“boyish” と異なり、“girlish” には否定的な含意がある。子供じみた、世間知らずの愛情ではない、自らの怒りを抑制して、フレッドに憐憫を感じるメアリが描かれる。

さらに、彼女が借金にめげっていないことがわかるのは、この章の後半である。娘の貯金を頼りにせねばならない父親に、“I have more than four-and-twenty pounds. I thought you would come, father, so I put it in my bag. See!

beautiful white notes and gold?” (p. 162: ch. 25)。ここでメアリは、父親に渡す金銭を、「きれいな白いお札と金貨」と、通貨というよりも、まるで物質のように表現している。それは、父親の重荷を軽くしようとする彼女の愛情表現である。しかし、それを受け取る父親、ケイレブ・ガースを“in his unconquerable indifference to money” (p. 162: ch. 25) と形容している点には、注意が必要である。金銭への無関心、無頓着が、彼のみならず、家族を苦境へ追いやっていることが、これまでに語られている。そのような彼の性質は、克服すべきものなのであろうか。

この小説の舞台が、第1次選挙法改正の時代、1830年前後に置かれていることは、異論がないだろう。成功する中産階級の人々が、資本家へと成り上がっていく時代でもある。そのような人物として、フレッドの父親であるヴィンシーが描かれている。彼は工場経営者であり、ミドルマーチの市長にもなっている。『ミドルマーチ』が書かれたのは、1871-2年である。その時点からすれば、ケイレブの金銭感覚は、時代遅れであり、ヴィンシーの時代が来るのは明らかである。しかし、エリオットは価値観の変化に容易には追従しない、できない人々に、関心を抱き続けている。

例えば、『フロス河の水車小屋』(1860)に登場するヒロイン、マギーの父親、タリヴァーが正にそのような人物である。水利権の裁判に負けたことから、タリヴァーの人生は、下降を辿っていくことになる。町の経営者や弁護士等を、田舎に住む彼は軽蔑しながらも、時代の流れは既に彼らに優位となっている。エリオットは、タリヴァーを変化する時代の犠牲者として描いてはいない。彼の失敗は、頑迷な彼の性格に起因するものである。しかし、読者は彼の軽率さや、頑固さに憐憫を感じる。さらに、彼を打ち負かすことになる資本家や弁護士の価値観へ疑問を抱くことになる。

『ミドルマーチ』のケイレブ・ガースは、そのようなタリヴァーと共通するものを持っている。それが、新しい時代への躊躇と抵抗である。しかし、タリヴァーは失意の中で亡くなり、ガースは新しい時代を生き抜いていく。この2人が異なるのは、ガースが自らの金銭への無頓着を改め、自己規制できたことによるのだろう。成功するブルジョワとなり、新しい時代を生き抜いていくためには、「きれいな白いお札と金貨」に無関心ではいられないはずだ。

しかし、ケイレブの金銭欲のなさ、土地差配という仕事への情熱と相俟って肯定的に表現されている。それは拜金主義や経済至上主義に陥り易

『ミドルマーチ』の諷刺家メアリ・ガース：ポリフォニーとしての『ミドルマーチ』

い、新しい時代の風潮を警戒してのことでもある。『ミドルマーチ』が書かれた1870年代には、既にそのような成長する中産階級の価値観に対する批判が明らかになっていたのである。このように、ケイレブを形容する表現、“in his unconquerable indifference to money”には、中産階級の価値観に対する二重の意味が含まれている。

しかし、明確で揺るぎないものもある。それがメアリのフレッドへの愛情である。

She was in a position in which she seemed to herself to be slighting Mr Farebrother, and this, in relation to a man who is much honoured, is always dangerous to the firmness of a grateful woman. To have a reason for going home the next day was a relief, for Mary earnestly desired to be always clear that she loved Fred best. When a tender affection has been storing itself in us through many of our years, the idea that we could accept any exchange for it seems to be a cheapening of our lives. (p. 358; ch. 57)

上記引用の後半部分、長年にわたり育ててきた愛情を変えることは、それまでの人生を軽視するものだと考え方は、メアリの真情でもあり、語り手の注釈でもある。現在は過去の結果であり、現在と未来も因果の関係にあり、必然的な関係にあるとの歴史観が、エリオットの中には色濃い。時間を経て蓄積されたものが、現在を決定するべきであり、現在は過去から自由ではあり得ない。

精神的にも不安定で、経済的にも将来が見えないフレッドに比べて、教区牧師フェアブラザーの欠点は、メアリとの年の差ぐらいである。しかし、尊敬と愛情は異なるものだ。メンターとして、妻を導く夫を期待するドロシアのような女性であったならば、フェアブラザー牧師にも勝機はあったであろう。しかし、メアリの結婚観はドロシアとは全く異なるものであった。それは、彼女と父親との次のような会話からも明らかである。

“I wonder if any other girl thinks her father the best man in the world!”

“Nonsense, child; you’ll think your husband better.”

“Impossible,” said Mary, relapsing into her usual tone; “husbands are an inferior class of men, who require keeping in order.” (p. 509; ch. 86)

上記引用箇所の最後のメアリの言葉には、ドロシアが女子教育に感じていたコンプレックスや、自らの判断の根拠に対する不安等は微塵もない。ドロシアにはあった男性に対するコンプレックスが、メアリには全く感じられない。

ロザモンドは、経済的に逼迫し、家賃を払えなくなった夫に対して、妻を不幸にするなら、結婚すべきではなかったと非難する。メアリは、ロザモンドのように、夫に依存し扶養されることを当然とする富裕層の結婚観を、共有していない。メアリは、夫に依存するというよりは、夫と対等な関係を構築しようとしている。それは、彼女がフレッドとの間で、子供時代から築いてきた関係の結果であり、成果でもある。

紳士教育へのコンプレックスもなく、男性への依存心もないメアリは、ドロシアやロザモンドとは、明らかに異なっている。一見、ドロシアとロザモンドは対照的であるが、共にヴィクトリア朝的な女性像の枠組の中に留まっている。フレッドが、牧師になることに反対したメアリは、中産階級の価値観、“respectability”を重視する人物ではない。それは、彼女が教職を、給金をもらうために、働いている振りをする仕事と、見なしていることにも表れている。メアリには、労働することへの嫌悪や禁忌が全くない。

ドロシアやロザモンドは、その社会階層ゆえに、あるいは裕福であったことから、ヴィクトリア朝的理想の女性の生き方を、根底から疑問視したり、変えたりすることは容易ではなかった。しかし、貧しいガス家のメアリには、最初から経済的に自立することが求められ、そうすることで、両親を初め周囲の人々に対しても、自己決定権を守ることができたのである。借金の工面のために、娘の貯金をあてにする父親は抑圧的ではない。ガス夫妻とメアリの関係は、親子でありながらも、一定の配慮がある関係である。

メアリのフレッドに対する自由闊達な態度や物言いは、新しい女性像の誕生が、社会規範の枠にとらわれない下層の人々から誕生する期待の現れでもある。ここで再び、メアリが人生を喜劇としてとらえていることを想起して、彼女のこの小説における役割を考えてみよう。

IV 諷刺家メアリ・ガース、“respectability”への懐疑

前掲のティモシー・モリスの論文「『ミドルマーチ』の対話的宇宙」では、次のように、この小説を位置づけている。

The gossip and dialects of Middlemarch form a matrix for the development of the characters. Dorothea, Lydgate, and Will Ladislaw oppose their own “pure” languages to the noisy, stratified ones of Middlemarch. (Morris 282)

ミドルマーチはゴシップの町であり、それにより、人々は翻弄されていく。例えば、バルストロードに対するラッフルズ殺害の疑惑は、ゴシップにより形成され、確定されていく。正確に言えば、ラッフルズの死に対して、バルストロードに刑事的責任があるとはいえないが、バルストロードはミドルマーチから排斥される。真相を知らない人々は、リドゲイトも共犯者と見なし、彼もミドルマーチを去ることになる。真実よりも、ゴシップ、世論が勝るということだ。

同様のことが、『フロス河の水車場』のヒロイン、マギーにも起きている。彼女は、従妹の男友達スティーヴンから誘惑され駆け落ちしかけるが、退けて町に戻ってくる。正確に言えば、マギーは道徳的に侵犯してはいないのだが、彼女は断罪されることになる⁵。マギーを聖オッグの町から排斥したのは、女たちのゴシップである。小説はそれを、世論、“public opinion”と表現している。

ティモシー・モリスによれば、このような現実に対して、ドロシア、リドゲイトと、ウィル・ラデイスローは異なった対応をしていることになる。前者の2人と異なり、ウィルはミドルマーチのコミュニティに排除されながらも、折り合いを付けていくからだ。モリスは、その理由を次のように分析している。

Part of Will’s attractiveness is his ability to speak so many of the stratified languages of the town. His mixed origin leads many not to trust him, but it also means that he can enter many of the small speaking communities, being equally an outsider in each. (Morris 285)

神学者カソーボンが出版しようとした『神話学全解』も、医者リドゲイトが究明しようとした「原始組織」も、一元的な体系の構築と、理解である。2人の大望は、いずれも挫折して終わる。ウィルは、ミドルマーチの人々から見れば、よそ者であるのみならず、出自の卑しい、怪しい人物と見なされている。しかし、彼の気侘な人生は、イギリス的な規範から逸脱し、多様な価値観を受容し、自由でもある。神学研究はドイツで進んでいると指摘する一方で、ローマに滞在し絵画にも通じている。その多才を認められて、ブルック氏から、『パイオニア』の編集を任せられ、彼の選挙活動を支援することになる。小説の結末では、ウィルは政治家として社会活動に従事することになる。

人はそれぞれ理想を持ち生きて行くのだが、現実の壁に直面し理想を容易には達成できない。人が現実と折り合いをつけていく場が、コミュニティということになる。ゴシップや世論は、正にコミュニティで交わされる対話により構築されるものである。バルストロードやリドゲイトが排除されたのは、彼らが犯したかもしれない罪を、ゴシップや、世論が形成し、確かなものとしたゆえである。それが事実か否かは、ミドルマーチにとりもはや問題ではない。

ウィルはドロシアの再婚相手として相応しくない人物と見なされ、ミドルマーチから追われるが、バルストロードやリドゲイトのように孤立無縁ではない。フェアブラザー家や、リドゲイト家は、彼に門戸を閉ざしてはいない。そのようなコミュニティのほころびをぬって、彼は最終的にはドロシアの愛を獲得する。

以上のように分析を進めると、ウィル・ラディスローのように、イギリス的な規範から逸脱し、“respectability”に無縁な人物の可能性が、この小説では示唆されている。中産階級的規範、価値観、“respectability”に対して、疑問が至る所で投げかけられている。上記で、分析をしてきたメアリ・ガスについても同様なことがいえるのではないだろうか。

拙論の冒頭で、バフチンの『小説の言葉』に言及して、彼が、フィールディング、サッカレイ、ディケンズ等の小説を「ユーモア小説」と分類していることを述べた。『ミドルマーチ』をそのような系譜に位置づけるのは、大胆なことだと述べた。しかし、これまで分析してきたように、メアリ・ガスに注目してこの小説を読み直した時、バフチンの言う「ユーモア小説」の伝統に分類されるのは不思議ではない。

人生を喜劇ととらえるメアリの態度や言語は、『ミドルマーチ』の他の登場人物と際立って異なる。ドロシア、ロザモンド、リドゲイト、カソーボン等の言動はいずれも、真面目でむしろ深刻なものである。しかし、何人かの例外がある。そのひとりにはブルック氏で、彼は正に18世紀のイギリス小説に登場する地主のような滑稽さがある。彼が受けた紳士教育は、何ら彼の知性を涵養せず、彼が所有する資産、土地も有効に運用されてはいない。明らかに時代遅れの人物であるが、誰にも管理されず、支配もされない、制御不可能で喜劇的人物である。しかし、彼自身が自らの人生を喜劇と見るとは書かれてはいない。彼にはそのような洞察力が与えられていない。

一方、メアリが、自らの人生を喜劇と見るということは、自らを対象化することを意味している。貧しく、経済的に自立することを余儀なくされ、決して好きではない教師の仕事をせねばならない人生は、楽しいものではない。敢えて、そのような人生を対象化することで、彼女は、新たな視座を獲得する。それは、ヴィクトリア朝的、中産階級的美徳や価値観に拘束されないものである。貧しい彼女の生活圏は広くはない。しかし、彼女は、ドロシアが感じた次のような閉塞感から、解放されている。

... there was the stifling oppression of that gentlewoman's world, where everything was done for her and none asked for her aid—where the sense of connection with a manifold pregnant existence had to be kept up painfully as an inward vision, instead of coming from without in claims that would have shaped her energies. —“What shall I do?” “Whatever you please, my dear”....

(p. 173; ch. 28)

ドロシアが打破しようとし、ロザモンドが執着した、「扶養される女」は、19世紀後期には、全ての女性が望めるものではなくなっている⁶。“respectability”は、“reality”のないものと化していったのである。

それゆえ、メアリ・ガースがこの小説で果たしているのは、そのような現実を表現することである。この小説の舞台は、1830年前後の地方都市であるから、メアリの造形は、新しすぎるかもしれない。しかしこの小説を読んだ同時代読者、つまり、1870年代の人々にとり、メアリとフレッドの対話が創り出す価値観や、この2人の関係は、ジェンダーや階級に対

する新しい在り方を示すものとなっている⁷。

いわば、モダン・ガールとも呼べるメアリの基盤は、どこにあるのだろうか。それは彼女が経済的に自立していることによるのである。彼女の収入は、教職、介護、リネン刺繍等であるから、贅沢は望めない。しかし、彼女は、経済的に自立することで、自らの人生における自己決定権を持っている⁸。フレッドとの関係も、対等なものである。そのような新しい女性像を、下層中産階級のメアリの中に描いたことに注目し、さらに議論を進めたい。

Elsie B. Michie が “Rich Woman, Poor Woman: Toward an Anthropology of the Nineteenth-Century Marriage Plot” において、『高慢と偏見』、『ジェーン・エア』、『大いなる遺産』等の小説は、裕福な女性ではなく、貧しい女性が結婚相手として選ばれる物語であると指摘している。なぜ、そのような小説が、19世紀に多く書かれたのだろうか。

Through privileging the poor woman over the rich one, the nineteenth-century English novel defines its heroes and heroines as individuals who are capable of resisting the complex appeals of the material forces that were becoming increasingly powerful as England's commercial culture expanded over the course of the nineteenth century. (Michie 421)

物質主義、資本主義が、進展していく19世紀において、それらの誘惑に負けない女主人公の形成が必要であったということである。ミッチーは、アダム・スミスの『道徳感情論』で説かれる “sympathy” にも言及しながら、この時代に小説が担った利他主義に注目している。

イヴ・コソフスキー・セジウィックは、『男同士の絆』で2人の男性の絆が、女性を媒介にして確かめられる様々な例を、文学作品の中で検証している⁹。セジウィックの三角関係が、ミッチーでは文化人類学を援用して、男2人、女2人の四角関係となる。男同士の間で女は譲渡されるのだが、その女はふたつに別れている。結婚すべき女と、結婚すべきでない女である。

『高慢と偏見』で、ダーシーが従妹のド・バーク嬢や友人ビングリーの妹と結婚せず、明らかに社会階層的には低いエリザベスと結婚することは、この小説の中核となる選択である。ミッチーによれば、富を選択すること

『ミドルマーチ』の諷刺家メアリ・ガース：ポリフォニーとしての『ミドルマーチ』

と、美德を選択することが必ずしも一致しないと、ジェーン・オースティンは感じていた。結末の幸福な結婚とは、そのような分断された選択が一致したものである。

例えば、イギリスの1840年代は、社会小説の時代である。飢餓の40年代を背景に、小説は、下層階級の人々を描き、直面する社会問題を中産階級の読者に伝えた。『オリヴァー・ツイスト』、『コニングズビー』、『メアリ・バートン』等がそれにあたる。ミッチーの視点は、そのような小説の役割を肯定するものと考えられる。

The nineteenth-century English writers who celebrated the substitution of benevolence for self-love were not political economists but novelists. In fiction the choice of altruism is made to seem inevitable, desirable, and self-evident, the consummation that we, as readers, devoutly wish for and experience in the non-mercenary marriages that concluded the story. One could, therefore, read political economy and the novel as sibling discourses.... (Michie 424)

物質主義、資本主義が進展していく19世紀の社会において、小説というメディアは、自己愛ではなく、利他主義を説く必要があったのである。『ミドルマーチ』におけるメアリ・ガースの役割も、ドロシアの自己愛や、ロザモンドの利己主義に対置するものと位置づけられる¹⁰。メアリとフレッドの結婚は、当初予想していたような、フレッドの身分落ちや、貧しい結婚生活ではなくなる。フレッドは、メアリの父親に助けられながら、フェザーストン老人の遺したストーン・コート屋敷を、メアリと共に管理することになるからだ。フレッドとメアリは屋敷に住み込み、彼らが得た収入で、この屋敷の資産を徐々に買い取っていくことができる。

つまり、彼らが、その美德を守り、慎ましく生活していくことができれば、フレッドが当初の遺産相続では得ることができなかった資産を得ることができることになる。メアリの結婚は、美德と富が一致するものとなるのである。このように分析を進めてくると、ドロシアの結婚以上に、メアリの結婚は、単にエピソード的なものではなく、この小説の本質に深く関与するものであることがわかる。

最後に、Dwight H. Purdyの“‘The One Poor Word’ in *Middlemarch*”に言及して拙論を閉じたい。この論文は、『ミドルマーチ』の中で、“poor”が

“commiseration”（哀れみ、同情）の意味で用いられている場合を分析している。全体では、145件あり、ドロシアが22件、ロザモンドが26件、リドゲイトが9件、カソーボンが12件で、これらの人々に集中している。メアリについては2件のみで、論文の注で言及されるだけだ（Purdy 820）。いずれも、父親が、メアリに関して、“poor child”と表現している箇所である。

パーディーは、“poor Dorothea”に関して次のような分析をしている。

Applied to Dorothea, “poor” in the first half of the novel persistently reminds us of the emotional and intellectual deficiencies rooted in her religiosity.... Dorothea’s religiosity is not by itself the cause of her woes. It combines with her class status to make her “poor.” She is “poor” because she has so little contact with what George Eliot called “reality” or “truthfulness,” with the ordinary lives depicted, she says famously in *Adam Bede*, by Dutch painters. (Purdy 809)

親の遺産により年収£700が保証され、ジェントリーの叔父の屋敷で、思い通りに振る舞うドロシア、深窓の令嬢である彼女には現実と接触する必要がない。そのような経験の欠如こそが、“poor Dorothea”と表現されている。そのような視点から見れば、確かにロザモンドに対して、この形容詞が最も多用されているというのは理解できる。ロザモンドこそ、現実から逃避し、自らの世界に閉じこもろうとする人物であるからだ。

その対極にあるのが、メアリである。彼女は冒頭で引用したように、厳しい現実を受容している。紳士階級のドロシアや富裕層のロザモンドとは異なり、彼女の人生は貧しく、恵まれてはいない。しかし、その現実を直視して、彼女が人生を喜劇ととらえ、甘受した時、ドロシアやロザモンドが達することができなかった美德と富の一致する結婚を手にすることができるのである¹¹。

『ミドルマーチ』の複数のプロットの中で、メアリのプロットは軽視されがちである。しかし、以上のように分析を進めてくれば、彼女のプロットがなぜ、他のプロットに比べて、明るい光が射しているのかが理解できる。メアリは、自らの人生を喜劇としてとらえなければ、不満と怒りに苛まれることになる厳しい人生を送っている。この小説は下層中産階級のメアリの現実感と美德を重視して、新たな意味を見出すことができるのだ。

メアリが表象する自立した女性像は、現代の読者にも共感を得ることが可能なモダンな女性像である。そのような女性像を、エリオットが、ドロシアや、ロザモンドではなく、自らに最も近い階級のメアリに造形したことは興味深い。ヴィクトリア朝ステレオタイプではない、自由闊達で、自立したメアリは、上層からではなく、下層から誕生してくる。

この小説の舞台となった19世紀初期から、この小説が書かれた19世紀後期に至る時代、イギリス社会が求めた小説の役割を、ジョージ・エリオットは十分自覚して、メアリ・ガースをこの小説で描いている。

注

- 1 この論文は、愛知県立大学大学院国際文化研究科、「イギリス小説研究」の授業準備の傍らで書いた。そのため、引用は、院生と共に読んだテキスト、Norton 版 *Middlemarch* によっている。これ以降は、その頁数と章のみを本文中に示す。
- 2 拙論「いかに変化を語るか——『ミドルマーチ』における女と科学」を参照。
- 3 バフチン『小説の言葉』は伊東一郎訳による。
- 4 ロッジ『バフチン以後』第3章「『ミドルマーチ』と古典的リアリズム小説の概念」を参照。
- 5 『フロス河の水車場』のヒロイン、マギーに関する議論は、拙論「*The Mill on the Floss* における Maggie、語り手、George Eliot」を参照。
- 6 川本静子『ガヴァネス』に、この時代の中産階級の女性を取り巻く社会の変化等が詳述されている。
- 7 フレッド・ヴィンシーは、工場経営者の息子であり、大学教育を受けていながら、メアリと結婚し、彼女の父親と同じ土地差配の仕事に就く。紳士教育を受けたフレッドにとり、メアリとの結婚は、身分落ちすることになる。しかし、フレッドとメアリの会話は、この2人がジェンダー的にも、階級的にも対等であることを表現している。
- 8 フェアブラザー牧師はそのようなメアリの自立を尊重して、子供時代から彼女を読んでいる呼び名、メアリではなく、Miss Garth と敢えて呼ぶことがあると、彼女への彼の敬意が説明される (p. 252; ch. 40)。
- 9 『男同士の絆』第8章では、エリオットの小説、『アダム・ビード』が分析されている。男性は、自分たちの間に権力差がある場合にも、哀れみ／軽蔑の対象となる女性を媒介にして、権力を交換したり、互いの価値を確認したりすることができるとしている。

- 10 ドロシアの夫への献身、農夫住宅の改善は、彼女の自己愛の現れでもある。夫の学問への献身は自らが賢くなるためであり、結婚後に、ロウィックに改善すべきことがないと知り落胆する彼女が描かれている (p. 50; ch. 9)。
- 11 ドロシアはウィルとの再婚により、カソーボンの遺産を失う。彼女はむしろ資産が重荷となり、それから解放される結婚を選択している。

Reference

- 阿部軍治『バフチンを読む』日本放送出版会、1997。
- バフチン、ミハイル、『小説の言葉』伊東一郎訳、平凡社、1996。
- Bloom, Harold. (ed) *George Eliot*. Philadelphia: Chelsea House, 1986.
- David, Deirdre. *Intellectual Women and Victorian Patriarchy: Harriet Martineau, Elizabeth Barrett Browning, George Eliot*. London: Macmillan, 1987.
- Eliot, George. *Middlemarch*. New York: Norton, 2000.
- Harris, Wendell V. “Bakhtinian Double Voicing in Dickens and Eliot.” *ELH*. 57.2 (1990): 445–58.
- 川本静子『ガヴァネス』みすず書房、2007。
- ロッジ、デイヴィッド、『バフチン以後』伊藤誓訳、法政大学出版局、1992。
- 前田彰一『物語のナラトロジー』彩流社、2004。
- Matsumoto Mieko. “Anxiety about Englishness in *Felix Holt, The Radical*.” *Ivy Never Sere*. Otowa-Shobo Tsurumi-Shoten, 2009.
- . 「*The Mill on the Floss* における Maggie、語り手、George Eliot」『愛知県立大学外国語学部紀要』(言語・文学編) 41 (2009): 25–47.
- . 「いかに変化を語るか—『ミドルマーチ』における女と科学」『ジョージ・エリオットの時空』北星堂書店、2000、251–60.
- Michie, Elsie B. “Rich Woman, Poor Woman: Toward an Anthropology of the Nineteenth-Century Marriage Plot.” *PMLA*. 124.2 (2009): 421–36.
- Morris, Timothy. “The Dialogic Universe of *Middlemarch*: Bakhtin’s Dialogic Fiction.” *Studies in the Novel*. 22 (1990): 282–95.
- 中川ゆき子『自由間接話法』アポロン社、1983。
- Purdy, Dwight H. ““The One Poor Word” in *Middlemarch*.” *SEL* 44, 4 (2004): 805–21.
- セジウィック、イヴ K. 『男同士の絆』上原早苗、亀沢美由紀訳、名古屋大学出版会、2001。